バリトゥン王（在位898-910年頃） の統治と王権強化

キーワード

古ジャワ語刻文、バリトゥン王、中部ジャワ時代、シーマ定立

山崎 美保

はじめに

本稿は中部ジャワ時代（7世紀頃から928年／929年）のバリトゥン Balitung 王（在位898-910年頃）の統治を、彼の統治期間に発布された刻文の内容から考察するものである。

中部ジャワ時代に関する先行研究のうち、ジョーンズはシーマ *sīma*（不輸不入地）定立⁽¹⁾ がラケ *rake*⁽²⁾（地方領主／高官）や寺院を統制するための王による手段として機能していたこと、シーマが寺院の維持、臣下への褒章、公共事業を目的として定立され、次第にシーマ定立が王の独占的権利となっていたことを指摘した [Jones 1984: 80]。また、クリスティは王やラケ、ラーマ *rāma*（村の長老）による各々の統治、税徴収などに関する社会構造、交易について論じている [Christie 1983; 1991]。これらの研究は、刻文の内容から当時のジャワ社会を詳細に描き出した点で突出している。さらに、ジョーンズは、バリトゥン王時代以前には王の命令によるシーマ定立は稀であったが、バリトゥン王時代から次第に増え、シンドック *Sindok* 王時代にはほぼすべてが王の命令によるものとなることを指摘し、カユワンギ *Kayuwangi* 王やバリトゥン王の時代よりもシンドック王の時代に王の権威がより高まったことを主張している [Jones 1984: 62-65, 80]。深見は、このジョーンズの考察に基づき、バリトゥン王時代に中央集権化が進んだことを指摘している [深見 2003: 59-60]。しかし、これらの先行研究では、バリトゥン王による王権強化の具体的な手段についてはほとんど議論されていない。クリスティは、バリトゥン王統治期に農業基盤の拡大や域内交易と海上交易からの収益の向上があったことを指摘し、バリトゥン王は彼の前任者たちより

も、強力で繁栄した国を統一し安定させたと主張している [Christie 2001: 48-49]。そして、バリトゥン王が彼の王権を確実にするためにとった手段として、904年にジャワにあるすべての仏教僧院の施設を国への財政上の義務から自由にするという命令を挙げている⁽³⁾ [Christie 2001: 48]。しかし、バリトゥン王が王権強化のためにとった手段は、この命令以外にもあったはずである。先行研究ではほとんど焦点が当てられてこなかった呪詛や議論にとり上げられていない刻文を考察することで、他の王権強化の手段を明らかにすることができる。

そこで本稿では、バリトゥン王がどのようにして王権強化を図ったのか、その具体的な手段とその背景を明らかにする。また、上述のジョーンズの議論を念頭に置きながら、シーマ定立が王の統治または王権強化においてどのような意味を持っていたのかを考察する。

まず、第Ⅰ章では、今回の考察対象であるバリトゥン王時代の刻文について説明し、刻文史料によって明らかにされた、9世紀から10世紀初めの古代ジャワ社会の構造について整理する。続く第Ⅱ章では、まずバリトゥン王の王権強化が行われた時代背景を明らかにするために、バリトゥン王時代が中部ジャワ時代においてどのような時期であったのかを確認する。次にバリトゥン王の統治期間に発布された刻文を整理し、これらの刻文の内容から、王がシーマ定立を統治の中でどのような手段として用いていたのか、また王が王権強化のためにどのような手段をとったのかを明らかにする。

表 本稿で使用了した刻文のリスト

名称	別称	年代 A.D.	所蔵場所
① Ayam Têas		901	MNJ: E69
② Luitan		901	BP3j ?
③ Taji	Ponorogo	901	MNJ: E12
④ Kayu Ara Hiwang	Boro Tengah	901	MNJ: D78
⑤ Watukura	Copenhagen	902	private collection?
⑥ Panggumulan	Kembang Arum A	902	Museum Sonobudoyo
⑦ Têlang II	Wonogiri II	904	不明
⑧ Rumwiga I		904	BP3y: BG637
⑨ Rumwiga II		905	BP3y: BG639
⑩ Randusari I	Poh	905	OD14439 (photo)
⑪ Kubukubu	Kubukubu Bhadrī	905	MNJ: E75
⑫ Palêpangan	Boro Budur	906	MNJ: E66
⑬ Kandangan	Gunung Kidul	906	MNJ: D17
⑭ Mantyasih I	kedu	907	MRPS: G2.18, G2.19 ? /OD8737 (photo)
⑮ Sangsang	Amsterdam	907	Koninklijk Instituut voor de Tropen: N/958
⑯ Rukam		907	BP3j: 1421, 1422
⑰ Kinêwu		907	Museum Blitar
⑱ Wanua Têngah III		908	BP3j: 1119
⑲ Kaladi	Pênanggungan	909	MNJ: E71

【網掛】：1980年代以降に発見された刻文

出典：筆者作成

【略語一覧】

BP3j = Balai Peleatarian Peninggalan Purbakala Jawa Tengah

(中部ジャワ考古遺物保存局)

BP3y = Balai Peleatarian Peninggalan Purbakala Yogyakarta
(ジョグジャカルタ考古遺物保存局)

MNJ = Museum Nasional Jakarta

(ジャカルタ国立博物館)

MRPS = Museum Radyapustaka Solo
(ソロ・ラジャプスタカ博物館)

MVL = Museum Volkenkunde Leiden
(ライデン民族博物館)

OD=Oudheidkundig Dienst

(オランダ領東インド考古局)

I 9世紀と10世紀初めにおけるジャワ社会の構造とシーマ定立

バリトゥン王時代の刻文は、主に古ジャワ語・古ジャワ文字が使用され、石や銅板に刻まれているものが多い。それらの刻文の内容は若干の例外はあるが、シーマ定立に関わるものが多く、そうした刻文には、シーマ定立に関わる、王、ラケ、村の民衆などの名前や出身地、定立の儀式（儀礼・供物・呪詛）が記される。

9世紀から10世紀初めに発布された刻文の内容の分析により明らかにされた当時のジャワ社会は、9世紀前半と9世紀後半において、その領域支配の構造に変化が生じている [山崎 2011: 204]。

9世紀前半には、ラケやサムガット *samgat* と呼ばれる地方領主がワトゥック *watĕk*（あるいはワタック *watak*）と呼ばれる領地を持ち、その領地に属する村々から税を徴収していた。ラケやサムガットの称号の後にはワトゥックの名称が続けられる場合が多く、これらの称号を持つ者は、そのワトゥックを統治していたと考えられる。例えば、ピカタンのラケ *Rake Pikatan* は、ピカタンのワトゥック *watĕk Pikatan* を支配していた。そのラケたちのなかから、古ジャワ語で「王」を意味するラトゥ *ratu* を称するラケが登場する。地方領主たちのなかで、より強い力を持った者がラトゥと呼ばれ、

発見場所	形状	転写
中部ジャワ：Purworejo, Semarang	銅板	Sarkar 1972 LX: 1-3
中部ジャワ：Pasanggrahan, Kesugihan, Cilacap	銅板	Titi, Dewi and Richardiana 1982: 12
東部ジャワ：Pamaraga, Madiun ?	銅板	Sarkar 1972 LX I : 4-14
中部ジャワ：Baratengah, Purvarejo, Kedu	石	Sarkar 1972 LX II: 15-20
不明	銅板	Sarkar 1972 LX III: 21-23
中部ジャワ：Kembang Arum, Yogyakarta	銅板	Titi, Dewi and Richardiana 1982: 13-22
中部ジャワ：Solo 川周辺 (Wanagiri)	銅板	Sarkar 1972 LX V: 42-50
中部ジャワ：Gedongan, Srimulyo, Piyungan, Bantul, Yogyakarta	銅板	Machi 1983: 37-40
中部ジャワ：Gedongan, Srimulyo, Piyungan, Bantul, Yogyakarta	銅板	Machi 1983: 42-44
中部ジャワ：Plembon, Randusari, Prambanan	銅板	Stutterheim 1940: 3-28
東部ジャワ：不明 (Wonorejo と Singosari の間)	銅板	Jones 1984: 168-177
中部ジャワ：Borobudur 周辺 (kedu)	銅板	Sarkar 1972 LX VIII: 55-59
中部ジャワ：Gunung Kidul, Yogyakarta	石	Sarkar 1972 LX IX: 60-63
中部ジャワ：Parakan ?	銅板	Sarkar 1972 LX X: 64-81
中部ジャワ：Pekalongan あるいは Tegal	銅板	Sarkar 1972 LX XII: 85-98
中部ジャワ：Petarongan, Parakan, Temanggung	銅板	Titi, Dewi and Richardiana 1982: 23-28
東部ジャワ：Blitar, Kediri	ガネーシャ像	Jones 1984: 158-159
中部ジャワ：Gandulan, Kaloran, Temanggung	銅板	Riboet 2003: 298-303
東部ジャワ：Penanggungan, Surabaya	銅板	Jones 1984: 180-194

他のラケたちから王として認められていた。この王もラケたちと同様に自身の領地を持ち、それに属する村々から税を徴収していた。9世紀前半では、ラケやサムガットによって寺院⁽⁴⁾のために村あるいは土地がシーマに定立されている。寺院はこれらのシーマから収入を得ていた。シーマ以外にも寺院が所有していた水田などがあつたようであるが、詳細は不明である。村はラーマ *rāma* と呼ばれる複数の長老によって運営されていた。

9世紀後半になると、大王を意味するシュリー・マハーラージャ *śrī mahārāja* の称号を冠する王が登場する。王は村々にマンガララ・ドウルウィア・ハジ *mangilala drwya haji* (以下, MDH) やパティ *patih* などの役人を派遣し、税を徴収していた。MDH は「王の税徴収者」を意味し、パティは王によって派遣され村に駐在した役人であると考えられる [Casparis 1986: 55; Christie 1983: 14]。そしてラケやサムガットは王の高官として刻文に列挙されるようになる。このことは、彼らが王に服属したことを意味するが、引き続き自らの領地から税を徴収していた。

シーマとは、サンスクリット語で「境界」を意味する「*sīmā*」に由来する語であるが、古代ジャワ社会では、王、ラケやサムガットたちによって、主に寺院、公共事業や役人への褒賞のために不輸入地として定立される村あるいはその一部の土地をシーマと呼んでいた。シーマとなった場合、それまで王、ラケやサムガットに納入されていた税が寺院や公共事業を請け負う者に納入されるようになる。シーマ定立を行うのは王あるいはラケやサムガットであり、寺院がシーマを定立することはない。王の恩恵・命令によって行われるシーマ定立では、主に高官たちが受領者であるが、実際にシーマからの利益を受け取る者（受益者）は、その寺院である⁽⁵⁾ [Jones 1984: 65-68]。シーマ内での諸問題を取り扱うのは、シーマの受益者である寺院の場合⁽⁶⁾ もあれば、シーマの受領者やその子孫である場合もある。シーマの定立に伴うその他の結果として、① MDH による、シーマあるいは寺院への干渉が禁止される、② 村がシーマとなった場合にその村での商業における免税を含む規定が適用される、③ しばしばシーマからの利益を受け取る寺院あるいはそのシーマの受領者にブアット・ハジ *buat haji*⁽⁷⁾ と呼ばれる王への義務が課せられる、④ シーマになった村や土地は、ワトゥックへの所属を停止する、などが刻文に記される。しかし、これらの結果がすべて刻文に記されるという訳ではなく、刻文によってその記載内容は異なる。

II バリトゥン王の統治

バリトゥン王はワトゥクラ *Watukura* (領地名) のラケの称号を持ち、またシュリ

ー・マハーラージャの称号も冠している。バリトゥン王が908年に発布したワヌア・トゥンガ Wanua Tengahan III 刻文によって、898年に即位したことがわかっている。そして最後にバリトゥン王の名が確認できるのは910年のタジ・グヌン Taji Gunung 刻文であることから、およそ12年間在位していたと考えられる。ワヌア・トゥンガ III 刻文によると、カユワンギ王（在位855-885年）の後に即位した4人の王の在位期間が短く、王宮から逃走した者もいたことから、バリトゥン王は王権の不安定な時期に即位したことがわかる [深見 2003: 58]。バリトゥン王の退位後は、バリトゥン王の高官であったダクシャ Dakṣa が910年頃に即位している。

1 バリトゥン王時代の刻文

本稿で使用するバリトゥン王時代の刻文は、901年から909年までの19点である（表）。19点のうち、バリトゥン王によるものが9点、バリトゥン王の恩恵やその名が記されたものが5点ある。これら14点の刻文の中には、東部ジャワから発見されたものもあるが、これらはバリトゥン王の支配領域で記されたものと考えられる。以下に、19点の刻文の概要を挙げる⁽⁸⁾。

①アヤム・トゥアス Ayam Tēas 刻文（901年1月1日）

大王であるワトゥクラのラケ（バリトゥン王）の命令がヒノ Hino のラケたちに伝えられ、アヤム・トゥアスのシーマの村すべてに商業に関する規則を与えた。

②ルイタン Luitan 刻文（901年3-4月）

ルイタンの住人が、彼らの守る水田が狭い為ウダーラ uddhāra（税）を満たすことができないとヒノのラケに伝えた。（ヒノの）ラケとパガルウシ Pagarwŕi のラケによって測量が命じられた。バリトゥン王の名は出てこない。

③タジ Taji 刻文（901年4月8日）

ワトゥ・ティハン Watu Tihang のラケが、タジの菜園の地をシーマとして定立した。シーマ定立の理由はカビクアンが建てられたからである。刻文の後半部分には大王バリトゥンの恩恵が述べられる。

④カユ・アラ・ヒワン Kayu Ara Hiwang 刻文（901年10月5日）

ワヌア・ポ Wanua Poh のラケが、カユ・アラ・ヒワンの村に属す全てを、パルヒヤンガンのシーマとして定立した。バリトゥン王の名は出てこない。

⑤ワトゥクラ Watukura 刻文（902年7-8月）⁽⁹⁾

大王バリトゥンがワトゥクラのラーマンタ rāmanta⁽¹⁰⁾ らにシーマの儀式を行うための費用を与えた。このラーマンタたちはバリトゥン王のダルマ・パンガストゥーラン dharma pangastūlan⁽¹¹⁾ をバードラ月の満月ごとに祈り、ダルマに祀られた神

への義務を負っている。ラーマンタたちは費用を受け取り、シーマ定立の儀式を行った。

⑥パングムラン Panggumulan 刻文 (902年12月27日)

ワンティル Wantil のラケらが、パングムランの村を、キナウハンの神と女神のために、シーマに定立した。バリトゥン王の名は出てこない。

⑦トゥラン Tèlang II 刻文 (904年1月11日)

「シャタシュリング Śataśringga に横たわる神である王」の予定を完遂するよう、ウラル Wlar のラケに大王バリトゥンの命令が伝えられた。不明瞭な部分もあるが、舟を贈ること、川に堤防をつくること、カムラーンをつくることが命じられ、それらを維持管理するためにトゥランの村などが贈られたようである。これらの村のラーマに課せられたブアット・ハジは、ダルマのシーマを整えることであり、前述の舟や川の堤防、カムラーンはこのダルマと関係があるものと考えられる⁽¹²⁾。これらの村は MDH の立ち入りが禁止され、そこでの商業に関する規定が記される。

⑧ルンウィガ Rumwiga I 刻文 (904年12月28日)

ルンウィガのラーマンタがウマーリタの村の税を減らすように頼み、大王バリトゥンとウアタン Wuatan のラケの恩恵によって叶えられた。刻文の最後にはママサン・グヌン mamasang gunung (儀礼のための支払いの一種か⁽¹³⁾) などの費用が述べられる。

⑨ルンウィガ II 刻文 (905年7-8月)

ルンウィガのラーマが、モマウマ・マムラティ Momaḥumah Mamrati のサムガットとウンカルティハン Wungkal Tihang のラケ、ヒノのラケに対し、1年ごとにマパサン・グヌン mapasang gununga のための銀などの恩恵が与えられるように請願している。ラーマらが贈り物をし、大王バリトゥンにも贈り物がされている。

⑩ランドゥサリ Randusari I 刻文 (905年7月17日)

大王バリトゥンの命令がヒノのラケとウワタン Wwatan のラケに下り、キニワンのワトゥックにあるボの村が何かしらの義務を終わりにすることが命じられた。シーマ定立の目的は、「パスティカに横たわる神」の聖なるチャイティア caitya⁽¹⁴⁾ のためである。

⑪クブクブ Kubukubu 刻文 (905年10月17日) (2枚目欠如)

ダプンタ・マンジャラ dapunta Mañjāla⁽¹⁵⁾ たちがフジュン Hujung のラケとマジヤウンタン Majawuntan のラケ⁽¹⁶⁾ にクブクブ・パドゥリーの土地をシーマとして定立した。カヒュナンのサン・アパティ sang apatih (役職名) の水を管 (おそらく灌漑用) に通すために定立されたと考えられる。また、フジュンのラケとマジヤウンタンのラケがサン・アパティによって同伴され、バントアン Bantan⁽¹⁷⁾ を打ち負かし

たことにより商業ができるという大王バリトゥンの恩恵を得たことが記される。

⑫パルパンガン Palēpangan 刻文（906年8月15日）

パルパンガンのラーマントがヒノのラケであるダクシャによって恩恵を与えられ、証文による保護を得た。その理由は、彼らが自分たちの水田が測量された広さよりも狭いことを主張し、その水田が再測量されたからである。バリトゥン王は言及されない。

⑬カンダンガン Kanḍangan 刻文（906年9月11日）

カンダンガンの村とエヒジョの村がパルヒヤンガンのシーマになったことが記される。これらの村がシーマとしてワトゥ・ティハン Watu Tihang のラケによって認められた。バリトゥン王は言及されない。

⑭マンティヤシ Mantyasih I 刻文（907年4月11日）

大王バリトゥンの命令がヒノのラケらに伝えられ、マンティヤシのパティたちのシーマとしてマンティヤシの村などが定立された。また、神々が列挙される箇所では「ボ・ピトゥのムダンで以前に神格化された者 rahyangta rumuhun ri mḍang ri poḥpi-tu」[B: 7-8] として8人の人物が挙げられている。その8人とは、マタラーム Matarām のラケである聖なる王サンジャヤ Sañjaya、大王であるパランカラン Parangkaran のラケ、大王であるパヌンガラ Panunggalan のラケ、大王であるワラク Warak のラケ、大王であるガルン Garung のラケ、大王であるピカタン Pikatan のラケ、大王であるカユワンギのラケ、大王であるワトゥ・フマラン Watu Humalang のラケである。

⑮サンサン Sangsang 刻文（907年5月4日）

大王バリトゥンの恩恵がヒノのラケに下り、ランワ Lamwa のサムガットにサンサンの村をウィハーラのためにシーマとするよう命じた。その理由はこの僧院がサムガットによって修復されているからである。王の恩恵として商業規定が記される。

⑯ルカム Rukam 刻文（907年10-11月）

大王バリトゥンの命令が、マハーマントリー Mahāmantrī⁽¹⁸⁾ に下り、噴火の土石流によって損害を受けたために、ルカムの村が王の祖母サンジワナ Sañjiwana のラケのダルマのシーマになるよう命じている。リムウンにある彼女のダルマに贈り物をし、カムラーンを建立した。そのブンチャン・ハジ buñchang hajy⁽¹⁹⁾ はカムラーンを維持することである。

⑰キヌウ Kinēwu 刻文（907年11月20日）

キヌウのラーマが大王バリトゥンとマハーマントリーに恩恵を与えられ、ラーマたちの水田の拡張が承認された。もともとラーマたちはキヌウの村が所属するランダマン Raṇḍaman のラケに水田の拡張を願い贈り物を贈ったが、水田が拡張される前

にラケは死んでしまった。ラーマたちは大王とラケたちに贈り物をし、水田拡張を実現している。

⑧ワヌア・トゥンガ Wanua Tengahan III 刻文 (908年9-10月)

ピカタンのウィハーラのシーマである水田に関する歴代の王の取り扱いが記載される。バリトゥン王に関しては以下のことが述べられている。898年に即位し、そのマハーマントリーはヒノのラケである。904年にジャワの「サン・ヒャン・ダルマ・ビハーラ⁽²⁰⁾ sang hyang dharmma bihāra i jawa」のすべてがスワタントラ swatantra (自立／自由) となる命令が下され、905年に大王はニュ・ガディン Nyu Gading からきて王宮に上がった。908年にはピカタンの僧院のために、一度破棄されたピカタンの水田がシーマとして再び定立された。

⑨カラディ Kaladi 刻文 (909年6月27日)⁽²¹⁾

大王バリトゥンの恩恵が、ヒノのラケに受け取られ、バワン Bawang のラケに伝えられた。その理由は、ガヤムのカラディとピャピャの土地がダンプンタ dampunta⁽²²⁾ たちによってパニ克蘭・ススル panikēlan susur (義務のことか) を行うために、花が植ええられるシーマとなるように請願されたからである。

2 バリトゥン王の統治と手段

次にこれらの刻文の内容から、王にとってのシーマ定立の意義と役割、王による王権強化の手段に関する検討を行う。この検討により、王がシーマ定立を統治のなかでどのような手段として使用していたのか、また王が王権強化のためにどのような手段をとったのかを明らかにしたい。

(1) シーマ定立の意義と役割

③④⑥⑬はラケによるシーマ定立である。④⑥⑬にはバリトゥン王に関する記述はない。このことはバリトゥン王の時代にはまだラケ個人がシーマ定立を行うことができ、シーマ定立は王の独占的権利でなかったことがわかる。しかし③ではバリトゥン王の恩恵に触れており、このラケあるいはこのタジの地域において王の権威が認められていたといえる。これらの刻文からは、バリトゥン王の時代には未だ王の権威は中部ジャワ全域に均等に及んでいなかったことが示唆される。②⑫は、シーマ定立ではないが、ラケたちへの水田の再測量の請願を記している。これらの刻文においてもバリトゥン王の名前は出てこない。それゆえ、②⑫の地域においても、王の権威が及んでいなかったと考えることもできるが、王の高官であるヒノのラケが両刻文において再測量を命じていることから、これらの地域においては王の権威が認められていたはずである。ここではラケがこの税に関わっており、おそらくこの水田からの税を徴収

していた。そのため、この水田の再測量に王は関わっておらず、名前が記されなかったと考えられる。一方⑦では、バリトゥン王とマハーメントリーであるダクシャによるキヌウのラーマたちへの水田拡張の恩恵が記されている。このキヌウの村については詳細がわからないが、②⑫とは異なり、バリトゥン王と何かしらの繋がりがあったと考えられる。

①⑦⑮では、特定の品物に関して規定の範囲内であれば税が免除されることが記され、さらに⑦⑮では、規定範囲を超えた場合の規則もみられる。これらの商業規定の記述は、現在までに発見されている刻文をみる限り、バリトゥン王以前の刻文にはみられない [Jones 1984: 37]。この商業規定によって一部の税が緩和されたことで、商業の活発化が期待されたと考えられる。このような規定（を含むシーマ定立）は、もちろん寺院維持の側面もあったであろうが、商業を自由にさせるといふ、バリトゥン王による経済を活発化させる方法の一つであった。他に経済の活発化を促したと考えられる例は⑦に記された舟渡しである。⑦に記された舟は、カムランに物資を運ぶための舟であると推測できるが、おそらくカムランだけでなく、周辺の村々の物資供給にとっても有益であったと考えられる。なぜなら、この刻文には「この川を低い・中間の・高い地位の、あらゆる人々が渡るとき、支払いを要求してはいけない。もし支払いを要求すれば大きな罪である」[B: 12] という記述があり、地位に関係なくこの川を自由に渡ることができたからである。また、堤防がつくられたことで舟の行き来が容易になったと考えられる。バリトゥン王は、この川の舟は誰でも利用できるという恩恵を与え、さらにこのシーマへの MDH の立ち入りを禁止することで、この地域の交通を整備し、商業・流通の活性化を促した。

⑪では2枚目のプレートが発見されていないため、この水の管がどのような目的でつくられたのかは定かではない。しかし、ダプンタやサンという語は宗教的地位の高い人に用いられた冠詞と考えられるため、おそらくこの水の管は寺院あるいは寺院が所有していた水田の水路ではないかと推測される。つまり、このシーマはフジュンのラケとマジャウンティンのラケ、そしてサン・アパティに關係する寺院あるいはその水田のための用水管設置を目的として定立されたと考えられる。この水路が特定の寺院や水田にのみ使用された可能性はあるが、おそらく周辺の水田などにも利用されたと考えるべきであろう。もしそうであるならば、このシーマは寺院やその周辺の水田に水を引くための水利事業を目的として定立されたといえる。この⑪や上述の⑦の事例は、水利や交通の整備を行っており、公共事業の性格を持っている。

⑭では、5人のパティが王の子どもの結婚式に貢献したことと毎年の神々への祈りにおける功績を認められて、王から褒賞としてこのシーマを与えられ、3年毎に交代しながらシーマからの利益を得ることが記される。このことは、シーマが褒賞の手段

の1つとして使用されていたことを示している。

さらに⑩では、バリトゥン王が土石流⁽²³⁾によって損害を受けた村を彼の祖母のダルマのシーマとするよう命令している。村がシーマとなった場合、商業における特権が与えられ、その村は経済的な利益を得る。また王やラケたちに徴収されていた税は寺院のために使われるので、その村の民衆に宗教面で「精神的な利益」を与えたと考えられる。このシーマは村の復興を目的として、経済的・精神的利益を村に与えるために定立されたと考えられる。これはバリトゥン王の統治におけるシーマ定立には救済措置の側面もあったことを示す。現在のところ、災害を受けた村の復興のためのシーマ定立はこの一例のみである。

⑨はバリトゥン王の恩恵によってパヌ克蘭・ススルのためのシーマが定立されたことを記録する。パヌ克蘭・ススルの詳細は不明であるが、おそらくダンプンタたちに課せられた何らかの義務であっただろう。「花を植えるためのシーマとして祈られた」とあるので、この義務は花を必要とする儀礼あるいは寺院に関する義務であると推定できる。このシーマの定立は寺院あるいはその儀礼の維持を目的としていた。

以上のように、シーマ定立は交通や水利の整備などの公共事業、臣下への褒賞、救済措置、寺院あるいは儀礼の維持のために行われた。そしてシーマ定立に伴う商業規定は、シーマ周辺の商業の活発化を促す意図があったと考えられる。

(2) 宗教の保護

シーマ定立の他に、儀礼や寺院の維持を目的とした命令が刻文に記されている。⑧⑨では、おそらく儀礼の費用のために、この村の税を減らすという恩恵が与えられた。ここからは宗教儀礼を維持・保護しようとしたバリトゥン王の意図が見てとれる。

⑬の904年に出されたバリトゥン王の命令は、ジャワにあるすべてのサン・ヒャン・ダルマ・ビハーラがMDHから干渉されない、つまり王の税から免除されたと解釈できる。バリトゥン王がこの命令を発布した理由は明記されていないが、サン・ヒャン・ダルマ・ビハーラにこのような恩恵を与えたことは、彼の寺院あるいは宗教に対する保護の1つの手段と考えられる。また、クリスティが指摘しているように、このような宗教の保護は彼の王権を確実なものとするための手段でもあった [Christie 2001: 48]。

以上のことから、バリトゥン王はシーマ定立を介さずとも、儀礼の費用に関する恩恵や寺院への免税の命令を出すことによって、儀礼や寺院の保護を行ったことが分かる。特にジャワにおけるすべてのサン・ヒャン・ダルマ・ビハーラへの免税に関する命令は、彼の王権強化の手段の1つであった。

(3) バリトゥン王と歴代の王たち

⑦の内容に関しては、おそらく「シャタシュリングに横たわる神」と何かしらの関わりを持ったカムランと舟のためにトゥランの村がシーマとして定立されたと考えられる。このように過去の王の予定を完遂するということは、バリトゥン王が過去の王を無視できず、その事業を引き継ぎ、統治を行わなければならないことを示唆する。あるいは、この過去の王の事業に何らかの利益を見出した可能性もあるが、この事業が「シャタシュリングに横たわる神」の予定であると強調されていることから、バリトゥン王が過去の王の事業を引き継がなければならない事情があったと考えられる。

また⑩では、シーマ定立の目的が、「パステिकाに横たわる神」つまり死後に神格化された王のチャイティアのためと記される。このチャイティアはおそらく神格化された王の廟のような性質のものと考えられる。パステिकाの神については、887年のムング・アンタン Munggu Antan 刻文に「パステिकाの神の王妃 *binihaji sang dewata ing pastika*」[3] という記述があり、パステिकाの神はおそらく885年以前に死去したと考えられるカユワンギ王のことである⁽²⁴⁾ [Christie 2001: 44]。カユワンギ王は初めてシュリー・マハーラージャの称号を用いた王である。バリトゥン王がこのチャイティアに恩恵を与えた理由は、バリトゥン王にとってカユワンギ王は偉大なる先王であり、カユワンギ王に敬意を表することは自らを歴代の王に連なる王として位置付ける手段であったのかもしれない。

⑭では神々への祈願の箇所、歴代の諸王を列挙している。その諸王の初めにラトゥ（王）としてサンジャヤが挙げられ、サンジャヤのあとにシュリー・マハーラージャ（大王）の称号を冠した7人のラケが続く。一般に、バリトゥン王は歴代の王を列挙することで、自らをその後継者として位置付け、自身を正統な王として示したのだと解釈される [Djoko 1986; Kusen 1994]。しかしこの王の列挙にはそれ以上の意味が込められていたことが、刻文の以下の記述からわかる。「もし、大王ワトゥクラのラケ・ディヤ・ダルモーダヤが呪いを発したなら、その鋭さは（歴代の王）より秀でている *lwiha sangkārīkā laṇḍapan yān pakaśapatha śrī mahārāja rakai watukura dyah darmmodaya mahāśambhu*」[B: 9]。この一文は、歴代の諸王を列挙した直後に記され、バリトゥン王は歴代の諸王の後継者として自身を位置付けただけではなく、さらに歴代の諸王よりも自身が優れた王であることを宣言したと考えられる。

刻文に歴代の王の名を記すことは稀であり、この⑭の刻文を除くと、⑯の刻文のみである。ただし、バリトゥン王とこれらの諸王との血縁関係の記述は一切ない。⑯の刻文においても同様で、バリトゥン王以前に11人の王をその即位年とともに列挙するが、王たちの血縁関係について述べるのは、828年に即位したガルンのラケを「トゥルックに横たわる聖なる人の子 *anak sang lumah i tluk*」[I: 6] と記す箇所のみである。

バリトゥン王の統治期間にヒノのラケであったダクシャはバリトゥン王の後に王位に就いているが、バリトゥン王との血縁関係は刻文には記されない。なぜ王は血縁関係を記さないのか。そもそもこれらの諸王に血縁関係はなく、その時の有力なラケが王として登位していたのだろうか。この点については今後の検討が必要である。

(4) 王の称号と後継者

バリトゥン王はラケ、シュリー・マハーラージャの称号のほかに、ヒンドゥー教の神格名を含む称号を冠している。たとえば、① *dyah dharmodaya mahāsambhu*, ⑤ *śrī īśwarakeśawotsawatungga*, ⑧ *sang janardanottungga*, ⑩ *śrī īśwarakeśawotsawatunggarudramurti* である。これらの称号のなかにみられる、マハーシャンブ *mahāsambhu*, イーシュワラ *īśwara* はヒンドゥー教神であるシヴァ神を指し、ルドラ *rudra* もしばしばシヴァ神と同一視される神である。またケーシャワ *keśawa*, ジャナルダナ *janardana* はヴィシュヌ神の別名である。これはおそらく称号にヒンドゥー教の神をとり入れることで、王の権威を高めることを目的に行われた。

バリトゥン王以前の王では、カユワンギ王が *śrī sajjanotsawatungga* [ランウィ Ramwi 刻文 (882年)] という称号を冠しているが、ヒンドゥー教の神格名は含んでいない。このことは、バリトゥン王以前の王たちとヒンドゥー教神の間には距離があり、王は神との結合によって神聖化されていなかったことが示唆される。これに対し、バリトゥン王は、少なくとも称号の上では、神との結合によって神聖化されていた⁽²⁵⁾。ただし、バリトゥン王がヒンドゥー教の神格名を含んだ称号を冠しているからといって、神と同一視され神格化されていたとは断言できない。

バリトゥン王時代の刻文において、バリトゥン王を除き、ヒンドゥー教神の名を含む称号を持つ者はダクシャだけである。彼はバリトゥン王のマハーマントリーとして頻繁に刻文に記され、バリトゥン王の後に即位している。901年の② *śrī bāhubajra pratipakṣakṣaya* の段階では神格名は含まれていないが、⑩ *bāhubajra pratipaksaksak-saya wisnumurti* ではヴィシュヌの化身を意味する「*wisnumurti*」が含まれている。

バリトゥン王を除き、唯一ダクシャの称号にヒンドゥー教の神格名が含まれていることは、バリトゥン王がダクシャを正式な後継者として認めていたことを示唆する。バリトゥン王は後継者をはっきりと定めておくことで、王権の安定化を図ったのではないか。約7年間の王の不在時期、そしてその後に即位したディア・ジュバンが発布した刻文の欠如は、バリトゥン王の即位までは王権が不安定であったことを示している。バリトゥン王は自身の在位中に、ダクシャを自らの正式な後継者として選び、彼にこのヒンドゥー教神を含んだ称号を与えることで、次の王はダクシャであることを他の高官や民衆に示していたのではないかと考えられる。

おわりに

バリトゥン王の統治において、シーマ定立は重要な統治の手段として機能していた。臣下への褒賞や僧院のためのシーマの再定立などから、バリトゥン王にとってのシーマ定立は、ジョーンズが指摘したように、ラケや寺院を制御するための手段であったと考えられる。さらに、バリトゥン王のシーマ定立は、従来指摘されていた寺院の維持、臣下への褒賞、公共事業だけではなく、災害により被害を受けた村の救済措置を目的としたものでもあった。さらに、シーマ定立に伴う商業規定は、シーマ内やその周辺における商業の活発化を促しただろう。そのためシーマ定立は商業活性化の手段としても利用されていたといえる。また、シーマは主に寺院のために定立され、寺院維持のために村からの収益が利用されるため、シーマとなった村やその民衆に精神的な利益を与えたとも考えられる。このように、シーマ定立は寺院に利益をもたらすだけでなく、民衆にも経済的・精神的利益をもたらした。

バリトゥン王の統治期には、王の名前が出てこない刻文、つまり王に権威づけされていない刻文もいくつか出されている。これらの刻文の内容は、王が関与する必要のないもの（現地の領主であるラケによって解決されるべき事柄）、または王の権威を必要としないラケによる個人的な定立であり、王が関与できなかったものと考えられる。つまり、バリトゥン王の統治期には依然として自立的なラケが存在していた。

そのような中で、バリトゥン王は自らの権威を高めるためにさまざまな試みを行った。一つは、先行研究ですでに指摘されているが、自らを歴代の王に連なる者として位置付けたことである。二つ目に、クリスティが指摘したように、ジャワにあるすべてのサン・ヒャン・ダルマ・ビハーラを免税にし、寺院を保護したことである。三つ目に先行研究では取り上げられていないが、マンティヤシI刻文において、歴代の王よりも自身が優れていることを宣言していることである。その一文は、従来考察対象とされてこなかった呪詛の中に見られる。バリトゥン王は、歴代の王よりも高い位置に自らを置こうとした。四つ目に、自らの称号にヒンドゥー教神の名前をとり入れたことである。このことは先行研究で触れられているが、その意義については論じられてこなかった。バリトゥン王がヒンドゥー教神を称号に用いたことは、自身の権威を高めることを目的としていたと考えられ、王権強化の一つの手段であったといえる。さらに、バリトゥン王は後継者を在位中に決めることで王権の安定化を図った。彼の後継者であるダクシャにヒンドゥー教神を含む称号を与えることで、彼が自らの後継者であることを人々に示したと考えられる。

バリトゥン王の即位以前には、約7年間の王位の空白期を経て即位したディア・ジュバンがいたが、依然として社会は政治的に不安定な時期にあったと考えられる。このような状況の中で即位したバリトゥン王は、自身の王権を強化させる必要があったのだろう。

以上のようなバリトゥン王の統治を鑑みると、古代ジャワ社会は9世紀後半には、王の権力が未だ弱く、地方には有力なラケが割拠していた状態であったが、10世紀に入ると、バリトゥン王によってさまざまな試みがなされ、次第に王権が強化されていったことがわかる。その試みの結果はジョーンズが指摘した王命によるシーマ定立の増加に反映されている。また、バリトゥン王の統治期には、王による刻文が中部ジャワだけでなく、東部ジャワからも発見されており、王の影響力の及ぶ領域が拡大していたと考えられる。

注

- (1) シーマ定立とはシーマの設置を意味する。定立という語は、刻文では「manusuk/sumusuk (区別する, 境界を定める)」と記され、英語では「demarcate/inaugurate/establish」と訳される [Jones 1984; Zoetmulder 1982: 1874]。我が国では、仲田が「画定」あるいは「定立」 [仲田1978]、深見が「定立」という語を用いている [深見 2003] が、本稿では先行研究に従い、「定立」の語を使用する。
- (2) ラケの異形として、ラカイ rakai, ラクルヤーン rakryān などがあるが、その使用に関して重要な意味の違いはない [Jones 1984: 93-94]。以下、異形はすべてラケに統一して表記する。
- (3) 寺院が何かしらの税をサムガット samgat などの権力に徴収されていたことがわかっている [Jones 1984: 78]。なお、サムガットに関しては、その異形として、パムガット pamgat などがあるが、その使用に関して重要な意味の違いはない [Jones 1984: 101-102]。以下、異形はすべてサムガットに統一する。
- (4) 本稿で述べる「寺院」とは、刻文に記されるダルマ dharma (dharma), カムラン kamulān, カビクアン kabikuan, ビハーラ bihāra (ウィハーラ wihāra), パルヒャンガン parhyangan, プラサーダ prasāda などのことである。これらの宗教建造物の性格ははっきりしないが、ダルマとプラサーダは一般に寺院 (仏教, ヒンドゥー教) を指し、カビクアンとビハーラは僧院, パルヒャンガンは山の神や精霊などを祀っていた場所であると考えられる [山崎 2011: 200-201]。
- (5) ジョーンズは、実際に王から許可を得てシーマを定立する者はラケたちであるが、そのシーマから利益を得るのは寺院であるので、前者を「受領者 recipient」, 後者を「受益者 beneficiary」として区別している [Jones 1984: 65]。
- (6) 寺院に祀られた神の場合も含む。
- (7) 例えば、クワック Kwak I 刻文では、チャイトラ月とアスジ月の昼夜平分時 (秋分・

春分)にパスティカ（の寺院）のために、花かごをつくるのがブアット・ハジとされる。

- (8) 以下、刻文の記述を引用する場合、表記は表の文献の転写に依拠するが、v は w に、ñ は ng に置き換え、表記を統一する。なお、刻文の引用箇所は「面：行数」の形式で示す。また転写からの引用ではない場合、異形のある単語は Zoetmulder [1982] の見出し語の綴りを使用する。
- (9) この 902 年の刻文の後に 1348 年の刻文が記されており、このワトゥクラ刻文は後代の複製と考えられている [Naerssen 1977: 74-76]。
- (10) ラーマンタはラーマに宗教的繋がりを示す称号で使われる nta という接辞がついたものである [Casparis 1986: 63, n. 11]。
- (11) ナールスンは、「ダルマ・パンガストゥーランはバリトゥン王の埋葬の建造物である。おそらくワトゥクラのラケたちの昔の領域に位置していた、バリトゥン王の祖先の寺院である」と述べている [Naerssen 1977: 75]。
- (12) ダルマのシーマとはカムランと舟を守るために贈られたトゥランなどの村々を指している。また商業規定を記した箇所では、免税範囲を超えた場合の税は、ダルマ、ダルマの守護者（おそらくダルマの管理者）、MDH に等分されることから、このシーマの受領者はダルマと考えられる。
- (13) 「mamasang」は「接頭辞 mam + pasang」から成る語と考えられる。スハディは、このママサン・グヌンを儀礼として捉えている [Machi 1983: 40]。またティハン Tihan 刻文（914 年）には、「pasang gunung」の語が見られ、リブットはこれを税の一種としている [Riboet 2003: 311-312]。この税が何を対象に課せられ、また何のために使用されるかは不明である。
- (14) インドにおいてチャイティアは、「思い出させるもの」を指す。聖樹などもチャイティアと呼ばれる。
- (15) ダブンタは宗教的地位の高い人に用いられた冠詞と考えられる。
- (16) 原文では Rêke と表記されるが、おそらく Rake である。
- (17) バンタンとはバリのことである [Jones 1984: 166]。
- (18) 王宮の高官たちの長を意味する。
- (19) プンチャン・ハジとは「王への夫役」を意味する [Zoetmulder 1982: 274]。
- (20) このダルマ・ビハーラは、ダルマと僧院を指すのか、ダルマ・ビハーラという建造物を指すのか不明であるため、以後もカタカナで表記する。クリスティは仏教僧院の施設と解釈している [Christie 2001: 48]。
- (21) この刻文はマジャパヒト時代に複製されたものであるという意見もある [Jones 1984: 178]。
- (22) 「dapunta」と同義であり、しばしば名前の前に置かれる語である。
- (23) ⑯の刻文が発見されたパラカン Parakan の近く、スンドロ Sundoro 山という火山の北にリヤンガン Liyangan という遺跡が 2008 年に発見された。この遺跡は古マタラム時

代の遺跡とされ、この遺跡の寺院遺構はスンドロ山の噴火による土石流によって破壊されたものと考えられている [Balai Arkeologi Yogyakarta 2011]。今後の調査の進展によって、この刻文に見られる土石流との関係が明らかになることが期待される。

- (24) カユワング王が死去した年は明確に記されていないが、次の王であるディア・タグワス dyah Tagwas は 885 年に即位している。
- (25) カスパリスは王の神聖化について、13 世紀以前の古ジャワ語文献や刻文においては明確に言及されることはめったにないが、(バリトゥン王の śrī dharmodaya mahāsambhu のような) 長いサンスクリット語の名前の使用は、ほとんどの王が実際に神聖化されていたことを示唆すると指摘している [Casparis 1992: 489, n. 9]。

参考文献

- Balai Arkeologi Yogyakarta. 2011. “Hasil Penelitian situs Liyangan 2011 (2011年リヤンガン遺跡の調査報告).” Balai Arkeologi Yogyakarta. 2015年1月15日アクセスhttp://arkeologijawa.com/index.php?action=news.detail&id_news=128
- Casparis, J. G. de. 1986. “Some Notes on Relations between Central and Local Government in Ancient Java.” In *Southeast Asia in the 9th to 14th Centuries*, edited by David G. Marr and A.C. Milner, 49-63. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- . 1992. “Some Notes on Ancient Indian Ritual in Indonesia.” In *Ritual, State and History in South Asia: Essays in Honour of J.C. Heesterman*, edited by A.W. van der Hoek, D.H.A. Kolff and M.S. Oort, 480-492. Leiden: E.J. Brill.
- Christie, J. W. 1983. “Rāja and rāma: The Classical State in Early Java.” In *Centers, Symbols, and Hierarchies: Essays on The Classical States of Southeast Asia* (Monograph Series No.26), edited by Lorraine Gesick, 9-44. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies.
- . 1991. “States without Cities: Demographic Trends in Early Java.” *Indonesia* 52: 23-40.
- . 2001. “Revisiting Early Mataram.” In *Fruits of Inspiration: Studies in Honour of Prof. J.G. de Casparis*, edited by Marijke J. Klokke and K.R. van Kooij, 25-55. Groningen: Egbert Forsten.
- Djoko Dwiyanto. 1986. “Pengamatan terhadap data kesejarahan dari prasasti Wanua Tengah III tahun 908 M (908年のワヌア・トゥンガIII刻文からの歴史資料に関する考察).” In *Pertemuan Ilmiah Arkeologi* IV, vol. 2a: 92-110. Jakarta: Pusat Penelitian Arkeologi Nasional.
- 深見純生. 2003. 「系譜を語らない王たち：王朝史再構成の構図」角田文衛ほか監修『古代王権の誕生 第2巻 東南アジア, 南アジア, アメリカ大陸編』50-62. 角川書店.
- Jones, A. M. B. 1984. *Early Tenth Century Java from the Inscriptions*. Dordrecht and Cinnaminson: Foris Publications.
- Kusen. 1994. “Raja-raja Mataram Kuna dari Sañjaya sampai Balitung sebuah rekonstruksi berdasarkan prasasti Wanua Tengah III (サンジャヤからバリトゥンまでの古マタラムの王たち—ワヌア・トゥンガIII刻文に基づく再構成).” *Berkala Arkeologi* 14: 82-94.
- Yogyakarta: Balai Arkeologi. (深見純生訳. 2001. 「古マタラム王統再構成：ワヌア・トゥンガ第三刻文」『桃山学院大学総合研究所紀要』26(3): 91-105.

- Machi, Suhadi. 1983. “Prasasti Rumwiga (ルンウィガ刻文).” *Berkala Arkeologi* 4: 37-47.
- 仲田浩三. 1978. 「ジャワにおける初期シーマ定立の編年に関する研究」『東方学』56: 131-112.
- Naerssen, F. H. van. 1977. “The Economic and Administrative History of Early Indonesia.” In *The Economic and Administrative History of Early Indonesia*, 1-84. Leiden and Köln: E.J. Brill.
- Riboet, D. 2003. *Sima dan bangunan keagamaan di Jawa abad X–IX TU* (9-10世紀のジャワにおけるシーマと宗教建造物). Jogjakarta: Prana Pena.
- Sarkar, H. B. 1971-1972. *Corpus of the Inscriptions of Jawa (up to 928 A.D.)*. 2 vols. Calcutta: Firma K.L. Mukhopadhyay.
- Stutterheim, W. F. 1940. “Oorkonde van Balitung uit 905 A.D. (Randoesari I).” In *Inscripties van Nederlandsch-Indië*, 3-28. Batavia: Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen.
- Titi Surti Nastati, Dyah Wijaya Dewi and Richardiana Kartakusuma (eds). 1982. *Tiga prasasti dari masa Balitung* (バリトゥン時代の3点の刻文). Jakarta: Pusat Penelitian Arkeologi Nasional.
- 山崎美保. 2011. 「9世紀から10世紀前半の古代ジャワ社会におけるシーマ定立の意義とそれに伴う儀式の役割: 古ジャワ語刻文からの考察」『東京外国語大学大学院博士後期課程論叢 言語・地域文化研究』17: 187-210.
- Zoetmulder, P. J. 1982. *Old Javanese English Dictionary*. 's-Gravenhage: Nijhoff.

The Reign and the Royal Authority in King Balitung's Period (898-c.910): An Analysis of Old Javanese Inscriptions from the 9th and 10th Centuries

YAMASAKI Miho

KEYWORDS

Old Javanese inscriptions, King Balitung, Central Javanese period, *sima*

ABSTRACT

In Central Java a number of religious foundations were built from the 8th to 10th centuries. Inscriptions which originated from the 9th and early 10th centuries mention that kings or officials with the titles *Rake* or *Samgat* founded a *sīma*. A *sīma* was a village or part of a village whose tax status was changed; for example, tax on artisans and traders was exempted. Previous studies suggest that the establishment

of a *sīma* could have been a means by which the king controlled a *Rake* or *Samgat* and a temple.

This paper focuses on King Balitung's reign and his attempts, in order to explain the process of the consolidation of royal authority and its historical background based on the analysis of the Old Javanese inscriptions. The paper also discusses the function of *sīmas* in Balitung's reign with regard to this process.

The analysis of the inscriptions leads us to the conclusion that in Balitung's reign there existed *Rakes* or *Samgats* who were acting on their own authority and initiative. This compelled Balitung to consolidate his authority. During Balitung's reign establishing *sīmas* was one of the important means not only to control *Rakes* or *Samgats* and temples, but also to provide disaster relief and to increase trade activities. The means of the consolidation of royal authority are as follows: (1) legitimating himself as a rightful successor to previous kings, (2) ordering that all religious foundations in Java should be free of financial obligations, (3) proclaiming that he was superior to previous kings, (4) incorporating Hindu deities' names into his title, and (5) choosing his successor during his reign. Apart from Balitung himself, only his successor Dakṣa was allowed to use a Hindu deity's name in the title. By deciding on his successor, he was attempting to ensure stability in royal authority. The result of these attempts by Balitung may have been reflected in an increase in his establishment of *sīma*.

(連絡先 : yamasaki.miho.i 0 @tufs.ac.jp)